編集：NPO日本文化体験交流塾
本体価格：4,800円（税込）

地域の歴史が学べる
通訳ガイドのための観光ガイドブック vol.3
京都編

地域の歴史が学べる
通訳ガイドのための観光ガイドブック vol.3
京都編
日本文化体験交流塾

地域の歴史が学べる

通訳ガイドのための観光ガイドブック vol.3

京都編

外国人に人気の観光スポットを48か所掲載
現役の通訳案内士が地域の魅力をレポート
トッププロがコラムで実践的ガイドテクニックを紹介

蓮華王院、清水寺、花街と祇園祭、平安神宮、慈照寺、
二つの離宮、大原、鞍馬、金閣寺、妙心寺、龍安寺、西陣、
鴨神社、北野天満宮、大徳寺、京都駅、二つの本願寺、
四条通り、御所と御苑、洛西エリアと高雄、二条城、
嵐山、東寺、東福寺、醍醐寺、伏見稲荷大社など

発行　NPO法人日本文化体験交流塾

本書を発行するにあたって

NPO日本文化体験交流塾は、「地域の歴史が学べる通訳ガイドのための観光ガイドブック」全5冊を発行することにいたしました。

その直接の理由は、全国通訳案内士試験の日本歴史の問題がとても難しくなったことです。国定教科書である「高校日本史A･B」及びその「副読本」に記載されていない観光地ごとの歴史が多く出題されるようになりました。

そこで、当交流塾としては、本試験対策の一環として、全国120か所を超える主要観光地について、その地域の歴史と観光の魅力を詳しく記した本書を発行することといたしました。

本書は、全国通訳案内士試験合格後も役立つバイブル的書物になると確信しています。実際、全国通訳案内士が一つの観光スポットを外国人観光客に案内するためには、多くの予備調査を必要とします。通常、インターネットの旅行サイトや観光ガイドブックを発掘して読みますが、大半は日本人観光客向けの情報ばかりで、顧客である外国人観光客の求める情報とは一致しません。ましてや、1週間を超える全国各地を訪問するスルーガイドにとって、事前情報の収集は極めて負担の大きな仕事です。この度の本著の125地域の800を超える観光スポットに関する情報は、必ず役に立つ情報であると信じています。

これを可能にしたのは、知識と現場を兼ね備えた全国通訳案内士33名による執筆です。関東以北については、主に首都圏を中心に活動する河村輝夫氏や橋本祐紀典氏、中網栄美子氏、河島泰斗氏など、中部に拠点を有する稲葉宏子氏など、近畿圏を中心に活動する加藤学氏、小島宏毅氏、加藤久子氏など、西日本地域では、大久保麻里子氏、上田宗範氏など、当該地域の実情に精通した地域のプロや情報通による歴史や地理等の詳細な記述に加え、観光ガイドとしての目線からの情報もふんだんに記載していただきました。

これに加え、山口和加子副理事長をはじめ、上原護副理事長、尾辻まゆみ氏、大岡やよい氏、太田貴子氏、原祥枝氏、奥本一代氏、池津敦子氏、黒石陽子氏、伊藤映子氏、村上堅治氏、吉村敦子氏、保里陽子氏らのトップガイドがコラムを担当し、訪日外国人に対し、欠かすことのできない観光ポイント、ガイド情報を記載しました。

本テキストの原案は、2020年6月13日から7月25日まで、全18回の研修資料としても活用しました。その講義は、動画にも収録していますので、いつでも配信が可能です。また、講義後、出版までに多数の日にちを要したのは、正確性を期すためです。

編集員である久保谷智子氏、蒔田真由美氏、浅井みら野氏、池上泰之氏、高野睦子氏の、丁寧な校正と編集作業に感謝いたします。

また、NPO日本文化体験交流塾の副理事長山口和加子氏と同副理事長の上原護氏のお二人の監修者がおられなかったら、刊行できなかったことは言うまでもありません。本書が、皆様のお役にたてますことを心から願っております。

なお、各観光スポットには、以下のマークを記載しました。

★★★　きわめて重要な観光スポットで必須の知識
★★　重要な観光スポットで必須の知識
★　良く訪問する観光スポットで、抑えておきたい知識

特定非営利活動法人日本文化体験交流塾（IJCEE）
理事長　米原亮三

地域の歴史が学べる
通訳ガイドのための観光ガイドブック

京都編

CONTENTS

目次

SPOT 1　蓮華王院——千体超える千手観音　★★ 6
SPOT 2　清水寺——釘のない大舞台　★★★ 12
SPOT 3　清水寺への参道付近——茶碗楽しむ散歩道　★ 18
六波羅蜜寺　21
建仁寺　21
高台寺　22
八坂の塔　25
SPOT 4　花街と祇園祭　★★★ 30
祇園甲部と祇園東 31
宮川町　33
先斗町　34
八坂神社　38
円山公園　40
鴨川　41
SPOT 5　平安神宮・岡崎 43
平安神宮　★　43
平安神宮神苑　45
南禅寺　★　47
水路閣　49
琵琶湖疏水　49
永観堂（禅林寺）　50
哲学の道　51
SPOT 6　慈照寺——銀じゃないのに銀閣寺　★★★ 55
SPOT 7　二つの離宮（桂離宮・修学院離宮）——宮廷文化の粋 60
桂離宮　★★★　60
修学院離宮　★　65
SPOT 8　大原——山里の宝石箱　★ 68
三千院　68
来迎院　70
勝林院　71
寂光院　72
SPOT 9　鞍馬——天狗の里　★ 74
鞍馬寺　74
貴船神社　80
SPOT 10　金閣寺——花の御所　★★★ 83
SPOT 11　妙心寺——臨済・妙心寺派の大本山　★ 95
退蔵院　101
桂春院　102
春光院　102
SPOT 12　龍安寺——謎だらけの石庭　★★★ 104
SPOT 13　西陣——応仁の乱の本拠地　★ 110
SPOT 14　鴨神社——悠久の古都の雅　★★ 115
下鴨神社　115
上賀茂神社　118
SPOT 15　北野天満宮——道真と梅の花　★ 123
SPOT 16　大徳寺——禅と茶　★★★ 128
大仙院　137
高桐院　138
龍源院　139
瑞峯院　139
今宮神社　140
SPOT 17　京都駅——拡大する交流の拠点　★ 142
京都タワー　144
京都鉄道博物館　146
京都水族館　146

KYOTO SPOT 1

蓮華王院

千体超える千手観音　★★

概要

京都市東山区にある仏堂。同じく東山区にある妙法院（天台宗寺院）に属しており、本堂正面に立ち並ぶ柱間の数にちなんだ「三十三間堂」の通称で広く知られる。長さ120mにわたる本堂の内部には千体を超える観音像、風神・雷神像、二十八部衆像などが安置され、その多くは鎌倉期の彫刻として国宝に指定されている。毎年１月の「大的（おおまと）大会」も有名で、同日に催される「楊枝（やなぎ）のお加持（かじ）」と合わせて蓮華王院を代表する年中行事となっている。

歴史

院政期、「法住寺」（現在でも三十三間堂の南にある）を中心としたこの一帯は後白河上皇（77代天皇、のちに法皇）の拠点で、「法住寺殿」と呼ばれる院御所が置かれていた。1164年、平清盛から寄進を受けた後白河上皇は法住寺殿の一角に仏堂の建立を発願し、蓮華王院とした。（なお、蓮華王とは千手観音のことである）

創建当初は現在より本格的な寺院だったとされるが、創建時の建造物は1249年の火災によってほぼ全焼し、現在の本堂や仏像の大半は1266年に再建されたものである。再建当初、本堂は朱塗りの外観に、内部には豪奢な模様が施されていたとされるが、750年の月日を経た今日では、天井にその痕跡をわずかに残すのみとなっている。

戦国時代、関白に就任した豊臣秀吉により蓮華王院の北側に方広寺（京の大仏）が建立されると、蓮華王院も方広寺の敷地に組み入れられ、「方広寺の千手堂」（千手観音を安置する仏堂）となった。蓮華王院の南側の塀は秀吉が寄進したという由来から「太閤塀」と呼ばれる。息子秀頼が築造させた南大門と合わせて、「方広寺千手堂」時代の蓮華王院の面影を伝える。

江戸時代、蓮華王院は方広寺と共に妙法院の管理下に入り、以来、現在に至るまで、「妙法院の仏堂」という立場を維持してきた。

今日に伝わる「通し矢」（写真）が始まったのも江戸時代である。当時盛んだった弓道競技のことで、様々な種目があったとされる。中でも24時間にできるだけ多くの矢を的に通すという種目が人気で、参加者の中には13,000本近い矢を射た強者もいたと伝えられる。現在でも蓮華王院では、江戸時代の通し矢にちなんだ「大的（おおまと）全国大会」という弓道大会が毎年1月中旬（15日に最も近い日曜日）に開かれており、振袖袴姿の新成人が全国から2,000人近く集まって腕を競う。

なお、「楊枝のお加持」は正式名称を「楊枝浄水供（ようじ・じょうすいく）」いい、聖樹と信じられていた柳の枝を使って浄水を参詣者の頭に振りかける。古くから頭痛平癒の御利益があると信じられてきた。

column

合戦の舞台となった法住寺

三十三間堂創設の礎となった法住寺は、天台宗の寺院。後白河法皇の拠点として知られ、1184年に「法住寺合戦」（源義仲と後白河法皇との合戦）の舞台となった。1868年に明治政府により神仏分離令が出される前は、後白河天皇陵も有した（現在は後白河天皇陵に隣接している）。

最近では、『サザエさん』の作者、長谷川町子（1920-92、1992年に女性として全国二人目の国民栄誉賞を受賞）の菩提寺としても知られる。

主な見どころ

①千手観音菩薩坐像と1,001体観音菩薩立像

「菩薩」とは「ブッダを目指す人」という意味のサンスクリット語「ボディーサットバ」の音訳に由来し、出家信者以外の救済も目指していた大乗仏教においては「衆生（＝大衆）を浄土へと導く存在」として篤く信仰されてきた。

中でも観音菩薩は、さまざまに形を変えながら人々を救う「現世利益をもたらす慈悲の菩薩」として日本で人気があり、様々な表情を用いて人々の悩みを解決する「十一面観音菩薩」や、無数の手を差し伸べて衆生を救う「千手観音菩薩」が観音菩薩の化身像として数多く作られた。

なお、千手観音の脇手の数は一般に40だが、これは一つ一つの手が25の世界に対応しているからと説明されている。

蓮華王院の本堂内部には、巨大な千手観音坐像を中心に左右500体ずつの観音菩薩立像が安置され、さらにもう１体が坐像の後ろにある。その脇を風神・雷神像が、前面を二十八部衆が守護している。

千手観音座像の眼は玉眼、ヒノキ材で作られ、内側は刳り抜かれている。

左右の千手観音立像のうち124体は、1246年の鎌倉時代の火災で焼失を免れた蓮華王院創建当初からのもの。残りは、火災後に本堂ともども再建されたものだ。この本堂再建時、仏像彫刻に大きく寄与したのが慶派の湛慶である。中央の千手観音菩薩坐像および一部の観音菩薩立像は、最晩年の湛慶による作と伝わる。観音像はいずれも漆塗りの寄木造。中央の巨大な坐像は高さが3.4mもあり、国宝。1,001体の観音菩薩立像は一つ一つ異なる表情や姿勢をとっており、こちらも国宝である。

三十三間堂の「三十三」という数字は、観音菩薩が三十三の化身を持つという仏教の教えにちなんだものである。観音菩薩を本尊とする仏教寺院ではラッキーナンバーといわれる。例えば清水寺の秘仏も観音菩薩像だが、これも33年周期でご開帳される。

②風神・雷神像と二十八部衆

合計1,001体を数える観音菩薩像の表を守護しているのが二十八部衆立像、脇を固めるのが風神雷神像で、ともに鎌倉彫刻の代表作として、国宝に指定されている。二十八部衆は、千手観音菩薩の従者と見なされ、信徒を守護する役割が期待されてきた。二十八部衆の眷属（けんぞく）（一族、配下の意）とされる風神・雷神は、風と雷を祀る一対の神を指す。特に風神は十二天の一つとして、古来より仏教の影響が強い地域で重んじられてきた。

なお、二十八部衆と風神・雷神はどちらも「仏教に由来する神々ではない」という共通点がある。古くから仏教は、伝来の途上、各地の神話や民俗信仰を教えの中に取り込んでおり、他の宗教（主にバラモン教やヒンドゥー教）に由来する神々を「仏教の守護神」として、「天部」というカテゴリーに加えてきた。

⋮INFORMATION⋮右足でリズム⋮

三十三間堂の二十八部衆はそれぞれ迫真的な表情と姿を見せている。その一つ、「迦楼羅王（かるらおう）像」は翼をもつ鳥頭人身で横笛を吹く姿だが、足元をよく見ると、なんと右足でリズムをとっているのが見て取れる。

KYOTO SPOT 3

清水寺参道付近

茶碗楽しむ散歩道 ★

概要

古代から清水寺は、京都で最も人気のある観光スポットである。そのため時代を追うごとに清水寺の参道は増えており、現在までに多くの参道が存在する。以下、代表的な参拝道を紹介したい。

松原通から清水坂を登るルート

最も伝統的な参道の一つ。室町時代までは現在の松原通が五条通と呼ばれ、五条大橋（現在の松原橋）で鴨川を渡り、六波羅を経由して清水寺に参拝するのが一般的だった。現在は原則車道だが、下り一方通行のため、歩行者で溢れている。

①松原通と五条通

松原通とは京都市内を東西に走る通り。現在は原則一方通行の小さな通りだが、平安時代に洛外とされていた地域を除き、おおむね平安京の五条大路にあたる。東端は清水寺の門前にまで達するため、東大路通以東は「清水道」とも呼ばれる。

平安時代、松原通の鴨川以東は仏教の「六道」にならって「六波羅」と呼ばれており、「あの世への入口」というイメージから六道珍皇寺などの寺院や墓地が数多く建てられた。その中でも特に重要なのが、後述する六波羅蜜寺である。またこの地域は、平安時代末期に平清盛を擁する平家の拠点だったことから、政治的にも重要な場所だった。

清盛時代の繁栄の痕跡が治承・寿永の乱で焼失した後も、鎌倉時代には幕府の出先機関である六波羅探題がおかれ、1272年の二月騒動や1333年の元弘の変の舞台になった。京都五花街の一つに数えられる宮川町もこの松原通沿いに位置し、清水寺参拝客を多く集めたことによって花街としていち早く発展したと言われる。

⋮ INFORMATION ⋮ ⋮ 集合場所 ⋮

京都市バスを利用して清水寺を目指す場合、五条坂もしくは清水道のいずれかのバス停で下車して参道を上がるとよい。二つの参道を10分弱上がると一本の参道になる。清水寺に向かって左角には有名な七味の店「七味屋本舗」（写真）があり、ここから左に産寧坂が始まり階段を下りていく。清水寺参道には多くの土産物店が連なっている。バス停から仁王門まで徒歩で15~20分は見ておいた方が良い。「七味屋本舗」は参道での自由行動後の集合場所におすすめのスポットである。

column

専門知識

❶「洛中」とは？

京都市の古くからの市街地をさす通称。「洛」とは都の別称で，中国の洛陽になぞらえた呼称。「洛中の範囲」は時代によって異なるが、今日では東大路、西大路、北大路、九条通の内側を指すことが多い。

❷六波羅探題とは

鎌倉幕府には当初、京都守護という出先機関があったが、承久の乱においてはその一部が後鳥羽上皇に同心した。それを踏まえ、乱の後、

KYOTO SPOT 13

西陣

応仁の乱の本拠地 ★

概要

京都市街地北西部の広い地域は、西陣と呼ばれている。西陣と言えば「西陣織」が有名だが、応仁の乱（1467-1477）で東軍の細川勝元に対し、西軍の山名宗全がこの地に本陣を築いたことが地名の由来となっている。

歴史――応仁の乱

「応仁の乱」は、室町時代の1467年に発生し約11年間続いた内乱である。室町幕府管領家の畠山氏、斯波氏の家督争いに端を発し、有力守護大名細川勝元と山名宗全の主導権争いに発展。室町幕府8代将軍足利義政の継嗣争いとも絡み合い、ほぼ全国的な争いへと拡大した。1493年の「明応の政変」と並んで、戦国時代へと移行する原因とされている。

長期に及ぶ戦乱は、和睦の結果、西軍が解体して収束を迎えるが、壊滅的な被害は主戦場となった京都全域に及び、街全体が荒廃した。大きな歪みを抱えた室町幕府は、この後、衰退への道を一気に下る。応仁元年に始まったため「応仁の乱」と呼ばれるが、3年後には文明へと改元されたため、「応仁・文明の乱」とも言う。

①戦乱の影響

長い戦いにもかかわらず、勝敗もつかず、主だった武将が戦死することもなく、誰一人恩恵を受けた者のいない戦いだった。この乱をきっかけに、日本各地で守護同士の利害がぶつかり合い、戦乱が恒常化した。国主が家臣に殺されるなど「下克上」が当たり前の時代になっていった。京では住人が激減。公家屋敷や歴史ある寺社はほとんどが戦乱で焼け、貴重な文物が数多く失われた。結局、足利義政の嫡男義尚が9代将軍を継ぐことになるが、将軍の権威は失墜し、次第に将軍家と管領細川家の対立が鮮明になっていった。

その後、室町幕府は100年続くものの、1573年に織田信長によって15代将軍義昭が京都から追放されて滅亡する。

※足利義政や応仁の乱を巡っては、不明な点も多く、義政の評価についても分かれる。京都６「慈照寺」の「★コラム・足利義政と応仁の乱を巡る謎」参照。

西陣織

①歴史

京都では5世紀頃から、渡来人である秦氏の一族が現在の京都市太秦付近に住みつき、養蚕と絹織物の技術を伝えたため、織物作りが始まった。平安京への遷都が行われると、朝廷では絹織物技術を受け継ぐ工人（職工）たちを「織部司」と呼ばれる役所のもとに組織し、綾・錦などの高級織物を生産させた。職工たちは現在の西陣の南側（京都市上京区上長者町）あたりに集まり、「織部町」と呼ばれる町ができたと言われる。

平安中期以降になると、律令政治の仕組みが緩んできたため、職工たちは自分たちの生業として織物業を営むようになった。織部町の近くの

KYOTO SPOT 26

醍醐寺

花見の古刹 ★

歴史と概要

醍醐寺（だいごじ）は、「古都京都の文化財」として世界遺産に登録された場所の１つ。874年に空海の孫弟子、聖宝（しょうぼう）により笠取山山頂に創建された。聖宝は山頂付近を醍醐山と名付けた。醍醐とは、牛乳を精製して作る液状のもので、究極の美味と伝えられ、尊い教えの比喩としても使われる。現在でも「醍醐味」といった表現が残っている。創建の縁起に残る「醍醐水」は、現在も枯れることなく湧き続けている。

醍醐寺は、山岳修験道の霊山として発展した「上醍醐」と、醍醐天皇の帰依を受けて大伽藍に発展した「下醍醐」に分けられる。両者を合わせて敷地は200万坪（約660万㎡）に及ぶ。

醍醐天皇の御願（ごがん）により、創建33年後の907年に薬師堂が建立された。現存の堂は1121年の建立で、国宝。安置されていた「薬師三尊像」（国宝）および「閻魔天像」「帝釈天像」「千手観音像」（いずれも重要文化財）は、現在、下醍醐の霊宝館に展示されている。天皇は自ら「醍醐」の諡号を選び、醍醐天皇と呼ばれるに至った。

913年には、やはり醍醐天皇の御願で「五大明王」（不動、降三世、軍荼梨、大威徳、金剛夜叉）を祭る「五大堂」が創建された。現在でも「五大力さん」の愛称で親しまれ、毎年２月の「五大力尊仁王会（ごだいりきそんにんのうえ）」では、150kg（女性は90kg）という巨大な鏡餅を持ち上げる力比べが行われている。以上の、「薬師信仰」「五大力信仰」、そして開山時に聖宝が建立した観音菩薩像に基づく「観音信仰」が、醍醐寺の三大信仰である。

主な見どころ

明治初期の廃仏毀釈の風潮に耐えて守りきった寺宝は15万点にのぼり、その多くが重要文化財、国宝に指定されている。

国宝の五重塔は、醍醐天皇の崩御後に発願され、20年後の951年に完成した。応仁の乱の災厄を逃れた京都市内最古の建築である。総高38m、うち相輪部が12.8mで全体の3割以上を占める。初層の「両界曼荼羅」と「真言八祖」を表した壁画も、塔本体とは別に、絵画として国宝に指定されている。

国宝の金堂（写真）は、豊臣秀吉の発願により、紀州から移築された建物である。

歴代座主が居住する坊である「三宝院」は、建造物の大半が重要文化財に、唐門と表書院が国宝に指定され、「醍醐の花見」の際に豊臣秀吉が基本設計を行った庭園は国の特別史跡・特別名勝に指定されている。

column

醍醐の花見

豊臣秀吉が1598年に醍醐寺で開いた花見を「醍醐の花見」と呼ぶ。前年に醍醐寺の桜を見ていた秀吉は、２月に再訪して花見を行うことを決定。日時を１か月後と定め、３日後には工事が開始された。

花見のために700本の桜があらたに植えられ、仁王門他の修復も行われた。秀吉自身が８回も下見に訪れたほどの熱の入れようだったという。

当日は、秀吉、息子の秀頼、前田利家以外は、女性ばかり1300人が招待された。ごちそうが振る舞われ、女性全員に２度の衣装替えが命じられた。秀吉は半年後に亡くなるが、まさに人生最後の花の饗宴だった。

現在は、毎年４月の第二日曜日に、醍醐寺で「豊太閤花見行列」（写真は2019年）が開催され、当時の様子が再現されている。また、日本人が花見をしながら宴会を楽しむようになったのはこの醍醐の花見からと言われている。

column

天下の名石

三宝院庭園の「亀島」は、幹の太い樹齢600年の五葉松で覆われて静寂を、「鶴島」は鶴が飛び立とうとする躍動感を、あらわしている。

この三宝院庭園の「主人石」と言われるのが、「天下の名石」として有名な「藤戸石（ふじといし）」（写真）である。両脇に小さな石を従え、阿弥陀三尊を表すといわれる。歴代の武将に引き継がれたことから天下の名石とされ、豊臣秀吉が聚楽第から醍醐の花見のため整備した三宝院庭園に運ばせた。

「藤戸」とは、海を挟んだ源平合戦の際、源氏の武将佐々木盛綱に、浅瀬を教えたのにもかかわらず殺された地元の漁夫を題材にした能の謡曲である。武士の犠牲にされた庶民の悲しみを伝える話だが、武家社会では、一番乗りを果たした盛綱の武功を伝えるものとなった。漁夫の殺害現場にあった「藤戸の石」は、天下の名石として、武将を虜にした。細川藤賢、織田信長、豊臣秀吉の手に次々と渡った後、秀吉が三宝院庭園の主人石にした。